

耳在し心

雷羽





みみ ほういち  
耳なし芳一  
試し読み版

雷羽 著

Ground Top 小説

# 「耳なし芳一-みみなしほういち-」

## 目次

- 一、[耳なし芳一](#)
- 二、[書籍情報](#)

## 楽曲

楽曲始、「political believer」 Monkey Majik  
楽曲終、「Cage」 鬼東ちひろ

## 人物

芳一（ほういち）  
識達（しきたつ）  
圓道（えんどう）

本ファイルはサンプルです。  
「耳なし芳一」の始め二ページを試し読みできます。  
以降は本編でお楽しみ下さい。  
サンプルとして、一部内容が異なります。

## 耳なし芳一

物静かな寺に、琵琶の音が響いた。今夜のような月では、まこと枯れ草の音が侘びしい。

阿弥陀寺の芳一と言えば、聞くものぞ知る琵琶の名手として知られている。芳一は寺前に置かれていた赤子だった。寒い中何刻置かれていたのか、僧に取り上げられる時にはすっかり冷たくなっていたという。だが、それが悪かったのか、数時も経たずにして目を失った。それ依頼、芳一は色というものを知らない。

ただ、琵琶の音だけが彼に視界を与えてくれる。その美しくももの悲しい音色は、芳一の子傷に触れたのか、芳一は和尚の琵琶を聞く度に非常に興味を示した。

一方、七百年を過ぎてもなお、恨みを遺す一族があった。平家である。壇ノ浦の戦いで平将門と源義経が戦い、まさに歴史に華を飾った平家は滅びた。多くの平家要人は舟から壇ノ浦の海底に身を投げ、三種の神器もともに沈んだと言われている。その周辺では平家蟹という平家の落人の怨念を宿し、背中に顔が浮き出た蟹が出るという。また、海面を漂う火の玉や、叫びに似た海鳴りが聞こえるなど、怪話が絶えない。また、海に引きずり込まうとするなどの作業も見られるようになり、その靈魂を沈めるために阿弥陀寺が建立された経緯である。

芳一は琵琶師に琵琶を倣うなり、平家物語を語るようになった。その語りは何とも情を誘い、鬼の目にも涙とも囁かれた。琵琶法師となるころには阿弥陀寺周辺では右に出るものはいない。ただ、琵琶法師といってもたまたまに和尚を喜ばすために弾くくらいでなんの役にも立たない。

空風の吹く夜、芳一は琵琶を手を取った。耳には風の音と、服の擦れる音、夏の虫の声。こういう日にはなぜか琵琶の音が恋しくなる。撥を取ると、一弾、突の良い音を出した。静かに物語を引き始めると、風の向きが変わった。盲目の芳一にはそれが手に取るようにわかる。少しの変化に敏感なのだ。

静寂の中で一曲を引き終わると、芳一は顔を上げた。

「どなた。」

「なるほどかき琵琶の音にいざ誘はれつゝ我居とめたり。吾が泣けど泣けどもこれ止まらずと思ひは壇の浦の海深くかの良き舎にも響けども過ぎぬ進まぬ時を思ふか。」

太い声がする。姿は分からないが、少し潮風の臭いがする。金属や木の音が響き、それが武士であることを悟った。

「御一興なれば今一度お弾きいたしましょうか。」

「芳一、俺について来い。高貴な御方が夜たび弾かれる芳一の琵琶に深く感銘頂いておられる。然らば、その腕にて七晩、高貴な御方の為、琵琶を弾き願いたく。」

「構いませぬが、私にお名前を頂戴してもよろしいか。」

その男は名乗らぬまま、芳一の手を引いた。その手に誘われるままに寺の外へと出て行く。暫く歩いた後に引く手が止まった。

だいぶ大きな屋敷なのか、大きな門が開かれる音がした。そして、幾度も廊下を進み曲がり、畳ばりの部屋に通された。

「芳一、よくぞ参った。そこに座れ。」

初老らしい声が右前から。

「貴方様が私の琵琶を畏れ多くも感銘頂いている御方でいらっしゃいますか。」

「某は家臣にすぎぬ。高貴な御方は後日より参られる。当より芳一は七晩ここで琵琶を弾け。早速であるが、そちの得意ときく平家物語を聞かせ願いたい。」

「では。」

琵琶を担ぐと、撥を鳴らした。平家物語を語り始めた。次第に周りから声が聞こえてきた。啜り泣く声から察するに声の主は何人もいるようだ。まるで取り囲まれているかのようにいろいろな方向から聞こえてくる。

壇ノ浦ではいつそうの弱々しい音が響いた。そして物語が終わると周りにいるであろう者ものが声を上げた。

「まこと素晴らしい、如何なる琵琶法師にても語れぬと思うていたが、芳一はまさに玉なり。」

「いやいや、勿体無うものよ。」

芳一は生まれてこのかた、賞賛を受けた事は無かったが、これほどまでに褒め称えられるとは思ってもみなかった。

それからというもの、毎晩のように姿の知れない男に誘われ、琵琶を弾く。琵琶を弾き終える事にはいつものように泣く声が聞こえるのだ。不思議な点はいくつかあるが、自らの才が認められる事は悪くはない。

ところが、毎晩出かけるのを見かねた和尚が芳一を呼び出した。

「芳一、主の身を案じるわけではないが、毎晩盲目の者が出かけるほど物騒なものはない。一体どこへ行っているのだ。万一にも出かけるならば下男の一人二人をつけよう。」

「和尚様、ご勘弁下さいませ。私用にて毎七晩、寺を留守にしているのでございます。どうぞご堪忍を。」

和尚もあえてそれ以上の詮索はしなかったが、やはり不安であったのか下男たちに見張りを頼んだ。もし芳一が出かけるようならば、その後をつけて何をしているのかを探そう言いつけておいたのだ。

その晩、芳一が出かけるのをみた下男たちは、こっそり芳一の後を追った。雨が降る中、必死に芳一を追ったのだが門を出た途端に芳一の姿を見失ってしまった。町の中を探るように歩いても、一向に見つからず、仕方なく寺へ戻ると、寺の敷地の端にある墓地から琵琶の音が響いていた。ここには壇ノ浦で水没した安徳天皇の墓がある。下男が木に隠れて芳一を見れば、一際大きな安徳天皇の墓の前で腰を下ろすと、琵琶を弾いていたのだ。琵琶の枯れた音が墓地に響き渡るたびに、なにやら辺りが明るくなり、どこからか火の玉が飛んできた。

下男たちは慌てて芳一に叫んだが、びくともしない。まるで声が聞こえていないように琵琶を奏しつづける。仕方ないと見た下男たちは、引きずるように芳一をその場から立ち退けさせると、寺へ逃げ帰った。

「芳一、どうしたのだ。」

下男に両脇を抱えられながら戻った芳一に、和尚は感歎を挙げた。すっかり濡れてしまった芳一の衣を脱がすと、温かい食事を出す。

「安徳天皇の記念墓などで琵琶を弾いているとは思いませんでした。しかし、お前が弾いている相手は霊であって、まことに危うき勤め。いつかはお前も連れ去られてしまうかもしれぬとなれば、放っては置けぬ。」

和尚は芳一の前に筆を出した。

「お前の体に経を書けば、霊には悟られまい。」

下男が芳一の禪を解くと、全裸の芳一を和尚の前に立たせた。

芳一の前で和尚は法衣を脱ぎ落とした。初老の体と弱冠の体。全裸になり和尚は芳一の若々しい肉体に筆を走らせる。芳一の太腿や尻にわざと擦り付けられる和尚の逸物。和尚の筆はまるで芳一の体を舐めるように官能的な動きをする。

体を這う柔らかく冷たい筆先に芳一の体が震えた。わざと冷たい雨水を混ぜたのだ。温かい食事をして火に当たったために体が火照り尚更その冷たい筆先に反応してしまう。その感覚に抗おうとするたびに筋肉が動く。和尚はわざと同じ場所を書いたり、乳首や臍を通るように筆を走らせた。それを知りつつも、芳一は動く事ができない。

下男たちは部屋の隅に座りながら二人を見ていた。その視線に芳一の逸物が勃き上がってゆく。

「ん・・・ああ・・・和尚・・・」

「芳一、声を立ててはならぬ。」

和尚とは何度も男色として交わった。自ら腰を振れない和尚のために、芳一自身が和尚に乗って悦ばせていた。老棒に尻を衝かれる快樂に耐えながら琵琶を奏するのが芳一の本当の奉仕なのだ。

「よし、次は背中を書いてやろう。四つん這いになれ。」

和尚に促されるまま、四つん這いになると、筆先が尻の穴をくすぐる。下から上に撫で上げられると、次は生暖かいものが触れた。和尚の逸物だ。ぐじゅっと生温い音を立てながら差し込まれる逸物。

「お主の中には経のかわりに儂の精汁を流し込んでおけば良からう。」

「んん・・・お、おしよ・・・」

そのまま和尚の添え手の動きと合わせるように尻を前後に動かす芳一。その間、背中へ冷たい筆が走る。芳一の敏感なところを書くと、その刺激で尻の穴が締まる。背中を経を書き終えると、和尚は芳一を仰向けにした。逸物が挿されたまま仰向けにされて何とも言えない快感が芳一の随を駆け巡る。

両足を広げると、太腿に経を書いていく。尻側を書くために両足を持ち上げられ恥ずかしい格好にさせられた。

最後に足の裏を書いた和尚はそのまま床へ仰向けになった。芳一が馬乗りになる格好は、いつも男色でやっていることだ。芳一は尻で力強く和尚の逸物を衝え込み、擦り上げた。

「おお、おお、良い、芳一・・・芳一・・・つつつ・・・おおおお」

芳一の先から透明の汁が漏れ、茎が和尚の腹に打ち付けられる度に腹へまき散らす。芳一は和尚が達するまで達してはならない。そのため、幾度となく寸止めされてきた。

芳一が経を唱えながら合掌し、和尚が達するまで腰を振り続ける。和尚の言う事は嘘だと分かっている、従わなければならないのが法師の務めだ。

「ああ、ああ、和尚・・・和尚・・・早くつつ・・・んん・・・」

二人の淫事にも下男たちは目を反らさない。その手には手拭いや香が持たれている。部屋中に湿った卑猥な音が響き、ぼたぼたと垂れ落ちる汗には墨も混じっている。

耳なし芳一（サンプル）

著 者 雷羽  
イラスト 雷羽  
発 行 二〇一〇年四月  
管理コード df-689268wbvp\_s  
著 作 権 Ground Top by LeiYu  
定 価 試供品

個人販売元

Ground Top <http://groundtop.sakura.ne.jp/>  
雷 羽 [banji.jp@gmail.com](mailto:banji.jp@gmail.com)

Printed in Tokyo, Japan.  
All Right Reserved.